

転生したらバルファル
クって……詰みに詰
んだ死にゲーでしょう
か

リン・オルタナティブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古龍種バルファルクへ転生した少年、天刃世紅てんじんせつらがセツラとして四苦八苦しながら第二
の人生を謳歌する！

ちゃんとシリアスもありますよ！

目 次

#7 赫耀 V S 暴君

#1 第二の人生	1
#2 食糧調達と情報整理	5
コラボストーリー 慧星と幽世の二重奏 (デュエット)	
#3 こんにちは新大陸!	10
#4 初めまして古龍! もしかしなく とも同類=サン!?	14
#5 俺の知つてる龍氣が別物だつた 件について	21
#6 脅餓ジョーを狂氣のゴーヤつて 呼んでるのは俺だけだろうか	31

#1 第二の人生

さて、いきなりだが一つ質問したい…。

ここはどこだ!?

いやまあはつきり言えば暗闇で丸く踞つている時点でどこかに押し込められているのは確かだよね。

この壁をぶち抜くぞ!!

記憶の整理はそのあとだー!と心で叫びながら唯一動かせる頭を上へアツパークトの要領で壁へと殴り付ける。

ピキキ、という音がすると少しだけヒビが入る。

よしあと一息、俺はまだ生きていいぞおお!

心でそう言い聞かせながら連續で頭を壁へ殴り続け、ヒビを広げていく。明るい光を見つけると殴るのをやめ、少しだけ頭以外の部位を動かそうと試みる。

両手両足は少しだけ動く、翼と尻尾は頭と一緒に動かせそうだな…ん? 翼と尻尾

!?

まあ、あとから確認するかと思いながらも翼と頭を壁へ押し付け、ふんぬと力をかけ

始める。ビキキキとさらにヒビが入り、ついにバキヤリ！という音と共に覆っていた壁を跡形もなく吹き飛ばす事に成功した。

さて……改めてどうなつてているんだ？

外に出たのはいいが、目の前に広がる景色を見て絶句してしまった。

焦土と化した平原、多少の木々が残っている様子から森か密林かなと推測しながら、近くに川とかないのと視線をキヨロキヨロさせ、河川を探し始める。

川を見つけたのは壁改め卵から解放された数時間後のことだった。よく死ななかつたなと思いつつ、その川に顔を突っ込み水をがぶ飲みする。

ああー生き返るんじやあ……。

大分水で喉の乾きを潤し、疲労を癒したところで川の水面に自身の顔を写すと二度目の驚愕に包まれた。

銀色に輝く鱗に覆われた流線型の体躯と鳥のような頭に鷹のような赤い目。特徴とも言える巨大な翼爪が折り重なつたような独特な形状の翼。

自身の姿を水面から視認した直後、欠落していた前後の記憶が復旧された。

コイツの名はバルファルク。『絶望と災厄の化身』、『銀翼の凶星』、『赤い彗星』とも呼ばれていた古龍種で別名天彗龍。

そうだ、M H X X でバルファルクのクエストを周回して素材を集めていた最中に気を失つて……それで……。

棒立ちで考え込みかけたが、ガサガサと言う音で思考の波が収まつた。

後回しだなと思いつつ音の正体を探るべく、じつとその草むらを見つめる。

草むらから現れたのは青い体色に赤いトサカ、黄色いくちばしが特徴の二足歩行型のモンスター、鳥竜種ランポス。ドスランポスと呼ばれる群れの長に統率されているが、一匹なのか俺の存在に気付いた直後、鳥竜種特有の鳴き声をあげ、警戒し始める。

はじめて目の当たりにする本物のランポスを俺は睨み付ける。

たつたそれだけでランポスは戦意を喪失したのかすごすご退散していく。

あれま、こんなにあつさりでいいの？

素直な感想を口には出せないから心でそう述べ、木陰で丸くなると目を閉じ、再び思考の海へと没入していく。

改めて考えてみるとありえない話だ。自身はバルファルクになつてゐるし、おまけに巣の近くが焼け野原ひろしになつていたし、ありやエヴァ零号機の自爆特功かよ等々、突っ込みを入れ続けたら持たないからここで終わるけど、明日は……能力テスト、だな

そこまで計画をたて終えると、本格的に睡眠を始める。勿論、索敵範囲を広げ、警戒

は怠つてはいなが万一何かがあればすぐ退却可能だが……。いつづな思いを心に秘め、バルフアルクへ転生した少年——天刃世紅ことセツラは意識を深い闇の中へ手放した。

#2 食糧調達と情報整理

目が覚めたら夢だつた。だなんて事が起ころる筈もなく、天彗龍生活は既に五日目に入つていた。

四日間何をやつていたかと言うと、周辺を走り回つて地形を頭に叩き込んでいました。はい。

某ピンクのチビが襲いかかるオンラインゲームアニメでも最初の10分で十キロ四方の縮尺地図を覚えろとか言いますし、これくらいは……ねえ。

うんうんと頷いていると、ギュルルルル……と腹の虫が鳴り響く。

四日間全て水のみで活動を続けていた為、そろそろお肉を食べたいと言う願望を持つてしまつた訳で、近くの草食モンスターを狩ろうかとぬぬぬと悩み、結局近くの草食モンスターを狩ることにした。

だつてお腹が持たないんだもん！よくまあ四日も水だけで生き延びたな俺。誉めてほしいよ全く！

そんなことを心で独り言ちつつ翼に龍気を溜め、アプロトスに狙いを定めて突貫する。

バルファルクが体内で生成する龍気はゴア・マガラが発する狂竜ウイルスに似ているらしいが、俺がバルフ^ア_ル^ク_の^体アルクに転生する前の記憶は曖昧でよくわからない……。

閑話休題。

うめえ。こんなに美味かつたのか……。アプノトスよ……。

俺はアプノトスの肉を咀嚼しながら、至福のときを過ごしていた。

モンハンでハンター達はアプノトスを狩り、その生肉で焼いたこんがり肉を食べてスマミナを上昇させていたなど俺は思い出した。

さて、と。……どうする?

アプノトスを丸々平らげたあと、身体を伸ばし全身の筋肉をほぐし、自身の背中にある一対の翼脚を開く。

ブレードの見える鋭角的な造形をした翼脚はバルファルクの特徴的なフオルムを形づくる要素の一つであり、ジエット機の如く飛んだり龍気を装填し射撃したり、はたまた槍のように使つたり、汎用性のある性能をしている。

「(さて、行くとしますか!)…… キイイイイイン!!」

決心すると龍気を噴射し、上空に舞い上がる。

バルファルクの骨格は狂竜野郎^{ゴア・マガラ}と同一の

骨格がベースになっているが、
マガラ骨格と呼称されている

ユーチューバー間では

全身のシルエットはそうとは思えない程変わった外見をしているのだ。

だがその特異な進化のおかげで、バルファルクは古龍一の飛行能力を獲得したのだ。
いい進化だと思う

多分。

エンジン機関のような音を翼から発しながら、俺は天空へと舞い上がった。



改めて上空に上ると、島の全貌が見えてきた。

島は小さく、無人島に近い島だつた。どちらかと言えば地図に書かることのない程
小さな島だろうか。

本来バルファルクは、狂竜野郎ゴア・マガラと同じくウイルスによつて繁殖する古龍
、つまるところ性別なしと捉えることも出来てしまふ。

「(……最悪バルファルク大量発生するのかな? あ、でもその前にネギが確実に止め
に来るだろうし……)」

ネギ 滅尽龍ネルギガンテ。自然の浄化作用の化身、古龍の抑止力とも呼べ
る、バルファルクと同じマガラ骨格の古龍。

全身を覆うトゲと圧倒的パワーを駆使して、タツクルや彼の十八番技、滅尽拳は真面
目に痛い…………らしい。

他の古龍は天候を変えたり地殻変動を起こしたりすることが可能だが、ネギにはそん

な能力はない。その代わりに、驚異的な再生能力が備わっており、破損した体の棘も、十数秒もあれば元通りに修復できてしまうというチートじみた生態がある。

「（――行つてみるかあ……。新大陸）」

ネギの出身は一応現大陸らしいが、彼が現在居座つている新大陸に足を運べば何かわかるかもしない。

そんな淡い希望を持ちつつ俺は加速し、はるか上空――天空の領域へとそのまま昇し続けていった。

バルファルクの設定を頭の隅に置いて忘れたまま、だが。

自分の繩張り

我々は見たんだ……。紅く光る彗星が飛んでいるのを……！

伝承の通りなら、かの古龍が再びこの地に現れたのだ。なにか不吉なことが起ころるかもしれない。すぐに誰かへこのことを伝えなければ……。

伝承は、繰り返される――。

昼間の空に突如として現れた紅い彗星は、世界中で目撃された。

そしてそのことは、ハンターズギルドの耳にも入り、その紅い彗星の進路は新大陸へ向かっていることが判明した。

ハンターズギルドは過去にも紅い彗星が見られていたことが記録されており、その目

撃地域はドンドルマや他の主な街でもその存在は確認している。

ギルド本部は、新大陸に紅い彗星が現れた際には調査を行い、その正体を掴むよう要請。万が一古龍だった場合は、無理に手出しあはしないようと警告を付け足し、新大陸へその情報を送った。

そしてある日――彗星が、新大陸へ降り立つた――。

コラボストーリー 訓星と幽世の二重奏（デュエット）

#3 こんにちは新大陸！

「(ヴァ”ア”ア”ア”ア！我が魂は！ZECTと共にありいいい！) キイイイイイイイン！」

新大陸の上空に到着して早々、剥がれ落ちた甲殻と共に赤い光を出しながら新大陸の地上へと降下する。流星群ならぬ龍星群を行いながら古代樹の森に着陸した俺は、辺りをキヨロキヨロと見回し、周辺に誰もいないことを確認するとホッと安堵の息を吐いた。

ただし、被害が全くないとは言えず、実際衝突した場所にはクレーターができているうえに、辺りは死屍累々。アプトノスなどの草食モンスターやジャグラスといった小型モンスターの死骸があちこちに量産されている状態だった。

「(……というか、なんか詰まつてるとか?)」

周囲を確認している途中、俺はふと翼脚に何か詰まつてていることに気づき、試しに閉じていた翼脚の膜を開いてみると、シユウウウウ……という音と共に真っ白な煙と赤い鱗粉のようなモノが噴き出した。しばらく放置していると煙も落ち着き、完全に煙

が出なくなると、俺は翼脚を閉じ元通りに収納する。

「（バルファルクにこんな設定あつたかなあ……？）」

そんなことを疑問に思つていたが、俺は地面を駆けその場から離れる。その際地面に足跡を残さないよう細心の注意を払い、ある程度離れた所まで走つてくると、やつと足を止め、大きく伸びをする。

辺りには水があり、アプトノスやケルビが潤いを求めて辺りを闊歩しており、如何にも平和であつた。

と思つていたが、どうやら派手な客が来たようだ。

グルルルウウオオオ!!

現れたのは、大きな恐竜のようなそれ。

それは、くすんだ桃色の鱗と背中から尻尾にかけて生えている黒い体毛を持ち、普段は背中に格納されている翼が特徴的な、獣竜種特有の2足歩行をとるモンスター。

“蛮顎竜” アンジャナフ

「（ファツ!? 最初の壁たるアンジャナフパイセンじやないですか!?!）」

なぜこんな所にと考える前に、俺の体はバックステップでアンジャナフから距離を取つていた。生存本能……と言えるのだろうか。

そのアンジャナフは、少しおかしい姿をしていた。体の一部から赤黒いオーラが噴き

出し、眼光は異常なほどの鋭さでこちらを睨みつけ、威嚇していた。

「あー……第一村人になつてしまつたのか。パイセン……」

俺は自身から発されている龍気の粒子を吸い込んだことで獰猛化してしまつたのだ
と思い、心の中で合掌した。

このアンジヤナフ^{個体}はもう助からない。手遅れになる前に始末しないと、大変なことに
なる。

そう思い、俺は自然と戦闘態勢へと移行した。翼脚の膜を広げ、展開する。体内に龍
氣を循環させ、戦闘能力を引き上げる。

グルオオオオオオオ!!

戦意を見せたからか、威嚇だけしていた獰猛化アンジヤナフは大きな雄叫びをあげ
る。喉には通常よりも高温の熱を溜めているのか、喉が焼け千切れそうなほどに赤熱化
していた。

俺は静かに精神を鎮め、瞼を下ろし、眼を閉じる。自分の鼓動が高鳴っているのを感じ取ると、再び眼を開けアンジヤナフを見据える。

獰猛化アンジヤナフが一步後退つたのを見やると、俺は四肢に力を込め、龍氣を活性
化させると――、
キイイイイイイイイイイイン!!

最大とまではいかないものの、十分な範囲で俺はジェットのような咆哮を放つ。
討伐対象、獰猛化アンジャナフ。俺の初陣を飾ってくれる絶好のモンスターだ。

赤く輝きし竜が降り立つた。間違いなく、災厄が起ころう。

だが我々は信じている。必ずや、この災厄の竜を討ち払うであろうと

。

#4 初めまして古龍!もしかしなくとも同類=サン!?

「赤く光る彗星……？」

レクスの言葉に私は首を傾げた。

アステラの古龍研究員の一人から告げられた紅い彗星、そしてその直後にその彗星が古代樹の森に墜落したという話は私も興味を持った。

途轍もない高度を飛ぶためには、それなりの飛行の能力が必要となる。ただの飛竜種なら飛ぶことはできない筈。それこそ――

『――古龍だという可能性は、ないのですか?』

「……！」

私の言葉にレクスは驚きの表情を見せ、研究員はやつぱりかと確信を得たのかそう呟いた。

研究者達の間では、古龍の可能性も考えていたが、確証がなく決断し得なかつたようだ。

仮に私と同じ古龍だというなら、異常なほどの飛行能力を得ていたとしても何ら問題はない筈だ。

それと同時に、私の脳裏には一つの存在が思い浮かんだ。

彼――風翔龍クシャルダオラことマサラのようにその彗星も私と同じ転生者だつたとしたら、私の方からコンタクトをとつて話をしたいもの――。

「我々の方でももう一度過去の記録を見直してみよう。それで――」

研究員の言葉が最後まで紡がれる前に、それらは鳴り響いた。

グルオオオオオオ!!

キイイイイイイイイイイ!!

一つは獣のように猛々しく、もう一つは機械音――ジェットエンジンのように甲高い咆哮がアステラ中に反響した。

私の思考はその二つの咆哮によつて搔き消され、知覚的且つ本能的に古代樹の森から二つの反応を探知した。

一つは以前に探知したアンジャナフの反応。そしてもう一つは――この地域で見られなかつた反応。

『こちらからですか‥‥』

「シオン‥‥‥！」

私はレクスの静止の呼びかけを振り払い、反応のあつた場所――エリア2付近へと身体を飛翔させる。

『…………あれですか……!?』

私は目を疑つた。その場所は地面があちこち焼け焦げ、周囲には争う2体のモンスター以外、影も形もなかつた。

エリアの中心で体をぶつけ合つているのは、アンジャナフと一度も見たことのない四足歩行の何か。

アンジャナフの身体から異様な赤黒い煙が噴き出しているのも気になるが、そんなアンジャナフと対峙するなにかの方へと視線を向ける。

その何かは全身が銀色の鱗で覆われ、背中からは翼膜がないため翼とは思えないが、巨大な翼爪が折り重なつていてるかのような独特な形状の翼脚が一対生えているのが確認できた。そして、そのなにかの翼脚は前に向けられ、噴出口らしき所から赤い玉らしきモノを六つ射出しアンジャナフへと攻撃を仕掛けていた。

『(これは……どっちに味方すれば、良いのでしょうか……)』

私は決めることができず、静かに静観することしかできなかつたが、銀色の方が押され始めたのを見ると口にエネルギーを溜め、そして――

戦闘討伐

0分ほどは経過していると思っている。

「(……ま、手短に終わらせた方が手つ取り早いのかもな)」

そんなことを思いつつ、俺は射撃を終えた片方の翼脚を縦に構え、獵猛化アンジヤナフの口から放たれた紅蓮の業火を防ぎ切る。

今所、勝負は膠着状態に持ち込めてはいるが、どちらが有利かは全くと言つていいほどわからないのが現状だ。

「(ともかく、さつさとケリをつけてどうにかしないと――)」

俺は防戦一方になり内心焦り始めていると、突然後方から極太の光が宙を走り、アンジヤナフへと命中する。

アンジヤナフの身体には先程の光が命中した箇所が黒く炭化しており、余程の熱量を誇っているのではないかと俺は推測した。

『……援護、します』

アンジヤナフが一步後退した直後、空から幼い声が聞こえたかと思うと、舞い降りてきたのは小柄な何か。

仄かに蒼白く光る身体、その身体のあちこちでなびく幽膜。四本足に一対二本の翼は、どことなく黒龍ミラボレアスを彷彿とさせる異様な姿をしていた。

「(ゼノさん……だと!?何故古代樹の森に……)」

そんなことも言つてられず、了承の意思表示で俺はコクリと頷く。会話する時間も今

は惜しい。

一度は後退したアンジャナフだったが、恐怖心よりも闘争本能が勝ったのか再び大きな咆哮をし、コチラへ突撃を始める。

「……さつきの熱線で、空中からパイセンの先にある地面を抉ってくれ。その間に俺は十八番の準備を始めておく」

『パイセン……？でも、それなら任せてください』

何か——冥灯龍ゼノ・ジーヴアがパイセン呼びに困惑したものの、再び空へ飛ぶのを尻目に、俺は獰猛化アンジャナフの進路方向から避けるように四肢で大きく跳躍する。

アンジャナフは俺を狙っているのか、足を止め地面を抉りながら速度を殺し、再び突撃してくるその直後に——、
キイイイイイ!

俺は彼女の合図になるよう短めではあるが咆哮する。これは先程の指示には入っていないが、果たして分かってくれるのか……。

彼女は上手く理解してくれたようで、上空から先程よりも多少抑えられた熱線が放たれる。熱線はアンジャナフが踏み出そうとした先の地面を見事に抉り、おまけなのか小さな爆発を起こした。

「(ナイス！これで終^{しま}いしてやるよ……！」

俺は再び翼脚を前に向かせ、左右3つずつある龍気噴出口全てに龍気を充填する。アンジヤナフは爆発で足を取られ転倒しダウンしているため、外すことはまず無い筈だ。……多分。

「(くらいな！破壊^{ボンクライ}光線!!)」

そんな叫び声と共に俺の翼脚から放たれたのは赤く光る極太^{ゲロ}のレーザー。その光線をくらつたアンジヤナフは光で一度姿が見えなくなつたものの、光が収まるときには完全に絶命したアンジヤナフの死骸が横たわっていた。赤黒い煙は、もう噴き出してはいなかつた。



私は熱線を放つたあとその後の戦闘を観察していましたが、物凄く特異だと言う事しかわかりませんでした。

最後に彼が放った光線は、私と同程度の威力を誇っているのがひしひしと感じ取れました。

『倒した、のですか？』

私は地面に降り、彼へと話しかけた。面構えは怖いところがあるが敵意がない事はわかっているため、比較的楽に声をかけられた。

「(そう…だな。獰猛化の証拠も消えてるし、問題ない筈)」

獰猛化?なんのことだろうか。
そのことを聞こうと思つたが、レクスやクリス、大団長たちが来たことで有耶無耶になつてしまつた。

#5 僕の知つてゐる龍氣が別物だつた件について

現在、アステラへ連行——保護されたバルファルクこと俺ですが、何やら議論中ですなえ。悪気はないんですが、聞き耳でもしておきましようか。

「本当に奴は古龍なのでしょうか……？」

「うむ……。そうでないと納得がいかん」

あー……どうやら俺を古龍だと見てないのかな?

そりやあバルファルクは古龍の中でも変な姿(?)してゐるしなあ、と思いつつなにか証明する方法がないかと俺が頭の中で模索していると、

『何か……ありましたか?』

考えてゐる俺の横から声がかかつた。

隣を見てみると、先程獰猛化したアンジヤナフパイセンを共に倒した小柄なゼノジー
ヴァが居た。

やはり近くで見るとなんというか、ゼノジーヴァと言うモンスターは奇妙な雰囲気を醸し出していることを改めて実感させられる。

それはそうと、彼女と幾つか情報を共有しておかないと。この世界で何が起こつてい

るのか、孤島生まれの俺は全く知らないからな。

『そういえば、自己紹介がまだだつたな。俺は』

ふとここで俺の口から言葉が途切れた。 そういえば、俺の名前ってなんだつけ？
小さなゼノさんが首を傾げているのを見ながらしばらく考え込んでいた俺は、記憶の中から自身の名前を引きずり出した。

『——セツラだ』

前世での俺の名前は天刃世紅てんじんせつら。 なんで忘れてたんだろうな。 ボブは訝しがる。

『ああ、ホントに良い名前、ですね』

『ああ、ホントに良い名前をもらつたよ』

俺の親は結構厨二臭い名前をつけたもんだ。 だがまあ、悪くないと言えば悪くないと
思つたのはここだけの話だ。

『あー…… そんでゼノさんの事はなんて呼べば……』

『…… ゼノさん？』

『——あ』

やつちまつた！ ついついゼノジーヴアのことをゼノさんって呼んじまつたああああ

小さなゼノさんが疑問に思うかの如く首を傾げてきたので、俺は前足をブルブルと振

りオロオロする仕草をするしかなかつた……。



『……落ち着きましたか？』

『すまない。変な姿を見せてしまつた』

このゼノさん優しいなあ。でもなんでゼノ・ジーヴアが古代樹の森にいるんだ？
本来なら専用フィールド？地脈の収束地？にいるはず……。おまけに少し小さい
し、幼体の幼体つて奴か。

『私は、シオンです』

『シオンか。それじゃあ改めてよろしく、シオン』

『はい、こちらこそよろしくおねがいします』

小さなゼノさん……シオンと握手をして、自己紹介が一息ついた所でシオンから
色々と質問が飛んできた。

『セツラさんの種族つて、古龍種ですか？』

シオンの口から最初に飛び出したのは核心を突く質問。俺が古龍かどうか。これは
問題なくYESとしか答えざるを得ない。なにせ誤魔化そうにも明らかに他のモンス
ターよりも歪で特徴的な体のつくりをしているのだ。

『そう……だな。”天彗龍”。それが俺の二つ名かな』

『天彗龍…… 初めて聞きますね』

『まあ確認されることそのものが少ない古龍の一体だからなあ……』
聞いたことのないと言うシオンに俺はそう答える。

バルファルクは1000年に一度目撃されているのみの存在、それも彗星としてでし
か確認されていないため事実上存在が確認されていなかつたのが現状だ。

『ちなみに、シオンがこれまでにあつた古龍つて何体いるんだ?』

『えーと、私がこれまでにあつたのは……』

俺はシオンからいままで出会った古龍の数とその古龍達に関する話を聞いた。

滅尽龍…… もといネギと出会つたことはないようだ。
『なるほど、ネロにハザク、イヴエル、そんでクシヤルさんか』
『あの…… その時々出てくる単語つてなんですか?』

『…… あー、癖だ。前世で呼んでたモンスターごとのあだ名つてやつさ』

俺がシオンへあだ名の説明をしていると、一人の男性ハンターが俺達へと近づいて來
た。

隙がない感じ…… 相当な強者の風格を感じる。まあ、俺も頑張つて龍気の操作を完
璧にできるよう、精進しないとな。

「んで、お前がシオンと戦った古龍か」

そんなことを心の中で決意していると、男の方から声をかけてくる。シオンの言葉から、男の名前はレクスというようだ。

『おう。セツラつて言うんだ。よろしく』

「ああ、よろしく」

レクスとの挨拶も済ませたところで、俺は再び翼脚に違和感を感じる。違和感が何かを探るため、俺は翼脚を開閉し始める。ガシュンガシュンつて鳴るのがロボットなのか何なのか。

『……つて、龍気不足か』

シオンやレクス、他のハンター達が一様に首を傾げる中、俺は一人だけ納得していた。バルファルクは元々龍気が活性源でもある。定期的に空気を取り込まないと、龍気を生成することができず体内に残る龍気の残量が少なくなるのだ。

『少し待つてくれないか？今から龍気を補充するからよ』

『り、龍気を… 補充？』

「おい待て。それってどういうことだ？」

レクスが説明を求めてくる。まあ……そもそもそうだね。バルファルクの生態を知つてる人ならわかるが、説明するより見てもらつた方が早そうだ。

『……百聞は一見にしかず。だつたかな、とにかく見てて』

そう言うと一旦人だから離れて、四肢に力を込める。翼脚を広げ翼膜を開き、準備万端。後は……思い切り空気を吸い込むだけ。

さあ、ショータイムだ！

キイイイイイイイイイ!!

独特なジエットのような金属音がアステラに響き渡る。

私の目の前で彼——セツラの胸部が赤く発光し、翼膜からは白い煙と仄かに発光する赤色の粒子が放出されている。

『……こんくらいで大丈夫か』

セツラはある程度空気を取り込んだあと、力を抜き体の姿勢を戻した。胸部は元通りの黒い甲殻に戻っている。

『……今のは、一体？』

『ん？ああ、そういうえば龍氣に関して説明してなかつたな』

セツラはそう言うと私達へ龍氣について説明してくれた。

『まず龍氣ってのは、俺の体内で生成されるエネルギーの名称だな。ハンターさん達が知っているモノとはまた違う物質だ』

つまり私の使う龍氣とは違うものらしい。奇妙な気配の原因がそれだと仮定すると、確かに納得がいく。

「つまり、貴方は龍氣が力の源なんですね？」

研究者の一人がセツラへ問いかけ、セツラは肯定の意を示す領きをしていた。未だ発見されていなかつた物質モノと聞いて、研究者たちはざわめき、盛り上がった。——しかし、

『——だが俺の龍氣は唯一のオリジナルであり、それが逆に脅威ともなる』

セツラは溜め息を一つして、古い伝承について語り始めた。それは、赤い彗星、そしてその彗星が現れた時の詳細な情報だった。

『——とまあ、そういうことだ』

セツラは伝承を語り終えると、突然軽く首を回し四肢を一つずつ伸ばしたり縮めたりするなど、まるで人間が行う“準備運動”的な行為をし始めたのだ。

『……何処に行くのですか？』

私はセツラへ問い合わせる。レクスや大団長らが問おうとした質問を私がしたのには、理由があつた。それは——

「おいおい……なんて殺氣だ」

大団長が冗談なしで言うほどの殺氣が、アステラ中へ流れ込んで来たのだ。丁度、セ

ツラが準備体操を始めたときだ。

『ううん、ここからだと相当奥っぽいな。あんのゴーヤ野郎……よりもよつてお前か』

小言のような声が聞こえたが、今はスルーするとして、セツラは準備運動を終えると、アステラの出口へと向かい始める。まさか、戦うというのか。これだけの殺気を持つ存在に。

「戦いに行くのか!?」

私の予測が当たり、レクスが驚愕の声色でセツラへ声をかける。セツラは当然だと言わんばかりに頷くと、翼脚を広げ姿勢を屈める。翼脚の後ろにある六個の穴からは赤い光が漏れ出ており、既に飛ぶ準備はできているようだ。

『……私も、行きます』

「シオン……！」

私はセツラに同行すると伝える。勿論、生半可な力で同行すれば、間違なく彼の足手まといになる。だけど私もある程度力を制御できるようになつていているため、遠距離からの援護ならこなせると考えているからだ。

『』

果たして、彼の答えは

彼女——シオンが同行すると言い出したため、結局俺は彼女を連れて古代樹の森上空を飛行していた。

古龍種二体なら、獰猛化したゴーヤさんを討伐することは可能だろう。

戦果と被害を天秤にかけた結果、シオンの同行を許すという結果になつた。なおハンター達には自己責任でと釘を差している。何故かつて？そりやあ相手は通常個体でも特殊個体でもない単純な火力が強化された獰猛なゴーヤさん。下手をすればアステラが全滅しかねないからだ。

『といつても、相手が相手だしなあ……』

『相手が相手……ですか』

俺が速度を落としている間に隣へ移動してきていたシオンが声をかけてくる。

俺の次の試合がまさかの古龍級生物であるゴーヤさん。激昂ゴリラ人じやない

だけありがたいと思わきやな。

『今回戦うのは、ゴーヤ改めイビルジョーの獰猛化個体だ』

『イビルジョー……！』

シオンが少し驚いた。どうやらゴーヤさんは知つていて、尚且交戦経験があるようだ。それなら基本のノウハウさえ教えてしまえば、対応可能な範囲内だ。

『ゴーヤが使うブレスも龍属性。』と言つても、俺は龍属性への耐性があるから、俺が前で戦うが、シオンに関してはゴーヤとは一戦交えただけだろ？そこでだ――
俺はシオンヘイビルジヨー^ゴヤに関しての戦闘ポイント、遠距離での基本的には立ち回りを教えると、シオンと二人で古代樹の森の最奥部へ飛翔していった。

#6 飢餓ジヨーを狂気のゴーヤつて呼んでるのは俺だけだろうか

古代樹の森へと突入した俺達を迎えたのは、イビルジヨー……ではなく、辺りに積み重なった沢山の死体の山だった。

死体が既に腐り始めており、臭いが物凄いことになつてているが、その死体達に共通しているのは身体の半分以上が欠損しているということだ。

『凄い死臭……』

『あく……こりやゴーヤの特殊個体が獰猛化した線も考慮しなきやいけないかもな』
『イビルジヨーの、特殊個体……ですか』

俺の隣で顔を顰めるシオンが興味津々に言葉を鸚鵡返しで発する。これは、ひょっとして、シオンはモンハンの知識が皆無なのか？

『そう……だな。怒り食らうイビルジヨー、それが特殊個体の名称でな――』

俺はその場を後にしながら、少し離れて追隨してくるシオンへ説明する。
『―――つまり、老年のイビルジヨーが、途轍もなくお腹が減つて暴走した個体……つてことですか？』

『簡単に説明すれば、 そうなるな』

シオンが特殊ゴーヤに関して知識を深めたところで、俺は走る脚のギアを上げる。ふと俺の視界の端に赤黒いオーラとどす黒いオーラ、2種類のオーラを纏つた何かが横切つたのだ。シオンも付かず離れずの距離感を保つたまま、俺の後に付いてくる。

やがて渓谷らしきところに辿り着くと、俺はそつと岩壁に身を隠した。この先、奥からさつき横切つた何かのオーラの残滓が濃く残っているのがわかつた。つまり、

『どうしたんですか？』

シオンがそう問い合わせてくるが、俺は前足をちょっと上げて止まれの意思を示す。俺の行動を理解したらしい、シオンは俺の影に隠れる形で身を潜める。

『噂をすればなんとやら。特殊ゴーヤの獰猛化個体だ』

『!!』

どうやら俺の最悪な予感が当たつてしまつたようだ。やはり怒り食らうイビルゴーヤが獰猛化してしまつたようだ。おまけに身体にある無数の傷から推察すると、歴戦の個体だ。

俺の言葉を聞いたシオンは驚きの意思を示す。その反応は無理もない話。ただのゴーヤではなく特殊、それも歴戦の個体が�iode化してしまつたのだ。放置し普通ならゲームでこんな属性山盛りの狂つたゴーヤが出るクエストがもしあれば即刻諦めていたが、ここ

はリアルの新大陸。アイツを放置していれば、やがて新大陸中の生命が食い尽くされてしまうのは明白だ。

おまけにゴーヤそのものが古龍級生物に指定されているモンスター。古龍相手にも繩張り争いをしかける猛者中の猛者。……これホントに勝てるのか？

『兎に角急ぐぞ！・アイツを放つておいたら、新大陸は確実に終わる！』

『は、はい！』

そう言うと俺は岩陰から飛び出しゴーヤの走つて行つた方角へと向かう。シオンも問題なく付いてきているようだ。ちよこちよこついてきているのが、正直言つて可愛すぎる。

『そういうれば、なんで歴戦のイビルジョーだつて、わかつたんですか？』

シオンはふとそんな質問をしてくる。確かに、普通ならよく目を凝らさなければ見えないだろう。だがそこはバルファルク。視力に関してはトップクラスだ。

『バルファルクは高い高度を飛行する古龍だつて話したよな？』

『そう、ですね』

『だからこそ、視力が発達したんだ。より遠く、より高いところから、獲物を見れるようについてな』

『……なるほど』

そんな説明をしていると濃密な龍属性エネルギーを感じとり、俺の足は自然と止まつた。どうやら目的地に到着したようだ。シオンを足を止め、辺りを見回していた。

ここは古代樹の森の奥地、ゲーム的にはエリア8ぐらいらしい。やけに広い空間だ。どうぞボス戦をしてくださいと言つてるようなものだ。

『……シオン』

『?、なんですか』

俺はシオンへ呼びかけ、右前足の指で奥の方を指す。そこには、何んだままピクリとも動かない何かがいた。一瞬も○○け姫に出てくる祟り神かと思つてしまつたが、濃い赤黒いオーラ……龍属性エネルギーのオーラと獰猛化のオーラが混ざつたオーラを纏つたゴーヤだつた。

眼は虚ろのまま、虚空を見つめながらもその瞳は赤く光つていてわかつた。

間違いない、特殊個体【怒り食らうイビルジョー】。前世の俺が狂気のゴーヤと、ユーズー間では飢餓ジョーと呼称されているそれが、俺達へ視線を向けると、即獲物だと判断したようだ。大きな咆哮をあげ、突進してくる。獰猛化の影響で足の筋肉が異常に発達しているのか、その速度は異常だ。

『やつぱりリミッターが外れてるか！』

『こ、こつちに来ます……！』

古龍二体
俺とシオンで止めることが出来たが、相手は獰猛化した飢餓ジヨー。何をしてくるか

狂氣のゴーヤ。

もわからぬまましく未知そのもの。俺達は初撃の迎撃を諦め、左右へ同時に飛び退る。

後ろへ消えた俺達の姿を捉えるためにゴーヤがこちらへ振り替える。うん、あきらかに正気を失っているね。目をギラつかせ、こちらを睨む様は暴食としか形容できない。

『どう、しますか?』

『とにかく――』

シオンがこちらへ問いかけてくるが、俺が答える前にゴーヤが咆哮し、再びこちらへ突進を仕掛けてくる。唐突に、そして理不尽な戦闘が幕開けたのだつた。

「おいおい、こいつあ……」

「……酷い有様だな」

シオンとセツラが戦闘を開始する少し前、レクスと大団長ら一期団は二体が向かつた古代樹の森へと到着した。

森の中腹に降り立つたが、辺りにはアプトノスやジャグラス、ドスジヤグラスやアンジャナフと言ったモンスターまで様々なモンスター達の死骸が転がっていた。

一行は導蟲の案内を頼りに道なき道、モンスター道とも言える道を掻き分けて二人の

後を追つていると。突然道案内をしていた導蟲が螢光色から青色に光り始めたのだ。

「これは……！」

クリスがその元まで足早に駆け寄ると、導蟲は大きな足跡と小さな足跡を映し出していた。

近くか

「そいつあ幸運だな。まだ遠くには行つてなさそう

レクスとグラントが会話をしていた時、レクス達ハンター一行の周囲に紅い光が次々と現れ、飛び回つては何かに引き寄せられるかのように飛んでいくが、その方向は足跡が続く方向だった。

「蝕龍蟲！あまり見られない筈なのに……」

クリスが再び驚いていたが、直後に導蟲が赤く発光し虫かごの中へ逃げ込んでしまつたため、何かが来る事を察知した一同は辺りを警戒する。

やがて

キイイイイイイイイイイイン!!!

グルルルオオオオアアアア!!

2体の…否、2つの咆哮が古代樹の森全体へ響き渡つた。

時は少し遡り、咆哮が響き渡る前の話だ。

奴に追いつかれていないのを確認すると、俺とシオンは少しだけ安堵の息を漏らした。

『シオン……今なら休めるだろうから、今のうちに休んでおけよ。これは長期戦の予感がする』

『それには……同感です……では、セツラさんも……無理、しないようにしてくださいね……』

『ああ、勿論だ』

シオンが休んでいる間に、俺はどうやら奴を効果的に倒すことが出来るのか、古龍としての脳をフル回転させて考えるが……。

『はあ……はあ……クソつ……』

幾つもの考えつく未来をシユミレートするがどれも詰んでしまい、攻めあぐねていた。その原因は二つ。一つに俺自身の龍気残量。そして、シオンの戦闘技術だ。

シオンの種族——ゼノ・ジーヴアは古龍の王たらしめる、赤龍ムフェト・ジーヴアの幼体でもあるため戦闘能力に問題はない。だが技術が無いとその強さを存分に引き出す事は不可能に近い。あるにしろ——一つだけ。……^特_殊バ^ルク^ク奇しき赫耀があるならば……の、話だが。

『… シオン。博打だが、奴を倒す方法が、一つだけある』

『本当に… 博打ですか…！』

『本当に… 博打だがな』

『俺は一息入れると、シオンへ可能性のある作戦を告げた。
バルファルクとしての本能を… 解放させる』

#7 赫耀 V S 暴君

『シオンにああ言つたものの、本当にうまくいくかなあ……』

セツラ^(俺)はシオンと別れ、単身あのゴーヤへ接近していた。龍属性が特に濃い地点まではまだまだ遠く、一度休息を入れた方が良さそうだ。そう判断すると、俺は近くの茂みに身を隠す。

深呼吸しながら、俺はシオンへ告げた作戦を脳裏に思い出していた。

◇◆◇◆◇

『バルファルクの本能……ですか』

『ああ、あまり使いたくないがな……』

シオンに伝えた作戦は次のようなものだ。

最初に俺がゴーヤとぶつかり戦闘。その間にシオンが自身の持つ最大攻撃をゴーヤへ叩き込むという、かなり単純且つ短期決戦に持ち込むにはピッタリの作戦だ。

リオレウスやラギアクルス、クック先生といった竜種、シリーズ屈指の裏ボスたるあのミラボニアスら古龍種など、大型モンスターの多くは弱点に龍属性を持つている事がある。

だがそこまで万能な属性というわけでもなく、ドスプレーさんことアオアシラが属する牙獣種、クンチュウ等の害虫が属している甲虫種などには全く効果を發揮しないなど、相手を選ぶ属性もあるのだ。

『まあ、オドガロン亞種とかオウガ亞種みたいな例外も多数いるんだが』

『使い勝手が良いとは限らないんですね』

『そういうことだな』

シオンの体力が回復し切るまでの時間稼ぎは出来るだろうなと思いつつ、俺は自身の内に眠る本来の本能がいつ目覚めるのかが非常に不安でもあった。

なにせ特殊個体、『奇しき赫耀のバルファルク』は破壊し尽くすまで止まらない暴走個体のことである。意図的に暴走することは、流石の俺でも断りたい。だが状況が状況だ。仕方ない。

『んじや、俺は一足先にドンパチやつてくるわ』

コンビニ行つてくるような軽さでシオンにそう告げると、極力音を出さぬように、且つ素早くその場をあとにする。

なんでそんなことを言つたのか、今考えると、シオンを精神的にリラックスさせたかつたのかな等と思うのだつた。



古代樹の森をしばらく走り続けた所で、俺は足を止めた。ようやく目的地——龍属性が最も濃い地点エリヤへ辿り着いたのだ。そして、お目当ての対象ターゲットもその地にいた。

足腰と頭、そして背部から赤黒い煙を吹き出しながら、アンジヤナフの死体を貪り喰らう渋い緑色のモンスター。怒り喰らうイビルジョーの上を行く個体だということは目に見えてわかつた。

『暴食の極み・イビルジョー……いや、名付けるなら“貪る暴食 イビルジョー”と言つた方がいいのか』

狂気のゴーヤ改め、貪る暴食イビルジョー……暴食ジョーはパイセンの死体食いをやめるところちらへジロリと虚ろな瞳を向けてくる。どうやらこちらの声が聞こえていたようだ。

『俺……なんかやつちやいました――』

グルルルオオオオ!!

俺の言葉も虚しく奴には届かず。暴食ジョーは食事を邪魔されたのを怒つているのか、大きな——とまではいかないものの、威嚇には十分なほどの咆哮を響かせながらもこちらへ勢い良く突進してくる。

『クソツ——やはり対話は不可能か……！』

俺は悪態をつきながらもヒラリと暴食ジョーの突進を躱し、奴の動向を伺う。暴食

ジヨーは急停止しながら旋回し、こちらへ視線を向け続ける。どんだけ執念深いんだか。

『そんだけ俺を喰いたいのか？なら——』

だが同時に、覚悟はキマつた。

俺はそこで言葉を切ると、最後のピースを埋めるための行動に出る。
四肢で地面を踏みしめ、大きく大気中の空気を吸い込む。吸い込む空気は自ずと龍氣へと変換され、自身の中を循環していく。龍氣で全身が満たされ、そして溢れ出す。そして——

『——俺を倒してから言ってみな』

——その一言を最後に、俺の視界は真っ赤に覆われた。

暴食ジヨーの目の前に佇む白銀の古龍：セツラの全身は深紅の光に覆われ、包まれる。

周囲からは、古代樹の森では目撃例が少ない蝕龍蟲がセツラの周りへと集結し、光の中へ入り込んでいく。

やがて光が収束し、セツラ——否、セツラらしき影が現れる。白銀だった身体の大部分が赫に侵食され、残された白銀の部分も焦げた鉄の如く真っ黒に変色し、唯一瞳だけ

は紅く紅く、真紅に彩られ、揺らめいていた。

フシユウウウウウウウウ

セツラは口腔部の隙間から暴食ジヨーと同様、またはそれ以上に黒ずんだ赤い煙を吹き出しながら一步、また一步と暴食ジヨーへと近づいていく。暴食ジヨーは一步も動けず、硬直している。恐れと飢餓感の狭間を彷徨つているのか。それは暴食ジヨー本人しかわからないが、後ずさつたところを見ると恐らく本能が逃走を促したのだろう。

セツラが暴食ジヨーの目と鼻の先まで近づいた所で、暴食ジヨーはセツラへ咆哮する。あたかも威圧するような、そんな咆哮が古代樹の森の中に響く。それを聞いたセツラは萎縮する事なく、むしろ闘争を搔き立て、暴食ジヨーの咆哮に対抗、あるいは重ねるかのように、甲高いバルファルク特有の咆哮が森に響き渡る。

そして、古代樹の森に2つの咆哮が響き渡つた。

暴走ジヨーがセツラへ巨体を生かした先制のタツクルを行う。だがセツラは避けることはせず、右の翼脚を盾のように構え、受け止める。なおもパワーでゴリ押そうとする暴走ジヨーを翼脚の間から覗く真紅に輝く瞳で見つめたセツラは、空いている左の翼

脚をハンマーのように変形させ、暴走ジヨーの腹へ振り上げる。

ガリガリという擦れる音を響かせながら、暴走ジヨーの片足がフワリと浮き上がり、お腹が無防備に晒される。

それをセツラは当然見逃さず、盾として機能させていた右の翼脚を槍ように変形させつつ、噴出口から紅く燃える龍氣を吹き出させつつ、暴走ジヨーのお腹へ突き出し、衝突させる。

衝突したお腹と翼脚の切つ先の接する点からマグマのように赤い稻妻がバチッと弾けた直後、ノックバックが大きかつたのか双方大きく後退する。だがセツラが四肢を踏ん張りギリギリの所で踏みとどまつたが、暴走ジヨーの方は反動が大きかつたようだ。バランスを崩し、体勢を立て直すまでにタイムラグが生じる。

暴走ジヨーが立て直したあと、距離が取れたのを警戒して両者睨み合いを続けていたが、痺れを切らしたのはセツラだった。

短く甲高い咆哮を上げたセツラは両方の翼脚の噴出口を後方へ向け、少しの距離だけ突進を行うと龍氣を吹かし、暴走ジヨーへ高速突進する。

暴走ジヨーはセツラの突進を受け止めようと両足を踏みしめるが、セツラのタツクルが暴走ジヨーの腹へ二度目の衝突を果たすと、暴走ジヨーの身体を慣性で貼り付けたまま突進し続ける。木々を薙ぎ倒し古代樹の森をワールドツアーレ如く飛び回り始める。

暴走ジヨーは抵抗をするために、セツラの首筋に噛みつこうとするが、セツラは噛み付かれる前にバレルロールを行い、古代樹の森上空へ舞い上がり、そのまま上へと上昇していく。

その光景はまさに彗星そのものなのだが、唯一違うのは、天へ昇る彗星のてっぺんに恐竜のような影があるのだつた――。

ある程度上昇するとセツラは一度噴出を止め、身体をクルリと180度回転させ、自身の頭部を古代樹の森へ向けると、再び噴出口からの龍氣噴出を再開し、古代樹の森へ真っ逆さまに落下していく。

暴食ジヨーはと言うと、既に死んだのか、はたまた気絶しているのか、上昇中も、落 下中もピクリとも動くことはなかつた。

やがて古代樹の森へ赤黒く燃える隕石が落下し、獣竜種の――十中八九暴食ジヨーなのだが――断末魔のような咆哮と共に黒炎が上空へと噴き上がり、その黒炎はアステラ含めた森全域の空を、赫く赫く染め上げた。